

オリジナリティーのある 町内会を目指して

宮城県仙台市泉区 いち な ざかひがし 市名坂東町内会 会長 草 貴子



あしたの日本を創る協会では、令和6年1月に「自治会町内会講座」を開催しました。2団体からの事例発表を紹介します。

(文責・事務局)

市名坂東町内会とは

市名坂東町内会は、宮城県仙台市泉区の新興住宅地内の町内会として、平成20年4月から運営を始め、女性役員のみで運営してきました。女性だけでつくろうとしていたのではなく、たまたま集まってくれたのが女性たちだった。

平成22年に集会所を建設した。銀行のローンを組んだ集会所建設は、仙台市内では初めてのことだった。私自身、昭和35年のチリ地震津波、昭和61年の洪水による土砂災害を経験したことから、災害時の地域の力がどれほど大切なものかを感じており、集会所の建設には強い思い入れがあった。集会所は平屋の70平米のワンフロアで、オール電化の対面キッチンを設置。トイレは障がい者用と合わせて2つ設置した。倉庫には私たちプロの主婦が選んだものを誰にでも分かるように用意している。キッチンペーパー、紙皿、紙コップ、石油ストーブ、卓上コンロ、サランラップや調味料、毛布、生理用品、ラジオなどがある。シャワーがないだけで後は何不自由なく暮らせるようになっていく。



1階平屋オール電化の集会所を平成22年に建設

東日本大震災の発生

集会所落成式から半年後の平成23年3月11日に東日本大震災が発生した。集会所には100名ほどの女性や子どもたちが避難してきた。とても寒い日で、3時過ぎには吹雪になった。集まった役員4名でバトロールをしたり、備蓄米や毛布を運んだり、それは多忙だった。音もなく、あかりもなく、本当に静かな、星の綺麗な夜だった。仙台市荒浜で200から300名のご遺体が打ち上げられているとラジオで聞いた時は頭が真っ白になり、会長としての責務がなければ泣き崩れていたと思う。会長になり一番辛かったのは、

3月11日のあの夜だった。皆さんの協力があり、3月20日には集会所を無事に閉めることができました。

ある時、我が家に3歳の子どもを持つ若いお母さんが訪ねてきて、「小さな子どもと一緒に集まれる場所を作ってもらえたらとても助かります」と言われた。弱者はお年寄り、子ども、障がい者だけではなく、小さな子どもを持つ母親も含まれるのだと、目から鱗が落ちたような気がした。また、震災時に紙コップの温かいコーヒーを差し出され、声をかけられたことがどんなに心強かったかと聞いて初めて、顔の見える町内会の意味が分かったように思えた。

若いお母さんの声を受け、平成23年11月から週に1回、集会所で子育て支援活動「ずんだっこ」を始めた。3人でスタートしたものが、今では年間1500名が利用するようになった。(一財)日本おもちゃ図書館財団に加盟したことで、絵本やおもちゃが寄付され、毎週賑やかな時間となった。防災協定を結んだ曹洞宗宮城県宗務所の和尚様が鬼になって豆撒き大会をしたこともあった。秋祭りには、子どもたちを連れた家族が多く参加した。お国自慢と称して、青森の煎餅汁、秋田のだまこ汁などが並び、焼き鳥に焼きそば、お餅つきなど盛り沢山だった。皆さんにお手伝いしてもらい、フル回転の楽しい時間となった。

新型コロナウイルス感染症から

新型コロナウイルスにより世界中で動きがストップした。現在でも完全に元に戻るのには難しい。「コロナだから」の一言でシャットアウトになることが多いのも事実だ。物事を判断するとき全員が賛成することはあり得ず「さあやるよの」一声で引っ張っているような状態だ。

コロナが始まった年に、町内会役員でラベンダーの苗を公園に240本植えた。町内会のつながりを絶やさないよう、6月には津軽三味線奏者、アコーディオン奏者を招いてラベンダー祭りを開催した。秋祭りほどの参加者数にはならなかったが、60名ほどが参加し、顔の見えるお付き合いができた。

子育て支援「ずんだっこ」も令和5年6月から再開した。元のようにはいかないが、赤ちゃんを抱っこしたお母さんたちが「こんには」とやって来るとホッとす。

役員と自主防災組織

私たち9人の町内会運営は初めてのことで、心配もたくさんあった。しかし、あくまでもボランティアである。オリジナリティーのある町内会、お互い様の町内会を目指し、無理のないようにしている。できそう

もないことには手を出さない。役所からの案内にも、都合がつかないときは無理をしない。誰かがやってみたことは、成功したら拍手して、失敗したら次回は気を付けるようにしている。役員会は月に1回開催しているが、全員揃ったことは一度もない。子どもの塾の送迎、親の介護など、ご家庭の事情を優先としている。総会は2月に行い、受験、引越、卒業式の時期を避けている。総会資料には「無断欠席の場合と委任状を提出しない方は会長一任とみなす」との一文を記載し、欠席者数を気にすることなく総会を開催している。日本赤十字社や個別の募金なども、個別集金ではなくて町内会費に上乘せして一括納入とし、役員、班長の負担を軽くしている。

役員会では、初めのうちは「主人に聞いてみます」と答えていた方もいたが、自分の考えを言ってほしいと促すと、いつの間にか意見はつきりと言うようになった。

私たちには完璧も完成もない。なぜならば、プロではないからだ。人のためもさることながら、自分自身の意識向上につながるようなことをやっていくと話している。

町内会に加入せず「災害時だけ助けて」というのはいかかなものか。東日本大震災から10年以上が経過し、自助・共助・公助の考え方が生まれ、国や市の対応も改善されてきた。この間に皆さんはどうしてきたか。人任せに

はしていかないか。

町内会役員の負担が重すぎることはないように、集会所は一時避難場所として災害発生時から24時間対応し、それ以降は仙台市の指定避難場所・市名坂小学校へ誘導することとした。災害発生時に何よりも大切なのは命だ。

まずは家族の安否を確認して、そこから地域への貢献を、と考えている。役員であるから、自主防災組織であるからとプレッシャーを背負う必要はない。最低限の規則は記載しているが、細かい指示はせず臨機応変にと考えている。

女性の視点と多様な視点

平成25年度から市名坂小学校区避難所運営委員会の事務局長を務めている。学区区の5つの町内会、学校、PTA、児童館、婦人防火クラブなど、20団体で構成し、運営をしている。東日本大震災の教訓を生かして、総務、救護、衛生、食料、情報班の他に、女性コーディネーター部門を設けている。避難所での尿漏れ問題、女性の生理の問題、子どもがうるさくても注意しない親、酒臭い、化粧臭いなど；避難所では様々な問題が生じるが、それに合った対応するのが女性コーディネーターの仕事だ。炊き出しだけが女性の仕事ではない。

全ての人には役割がある。女性の視点はもちろん素晴らしいことだが、それを特別視するのではなく、男性も女性もお互いの得意分野を生かし、認め合うことで物事は良い方向に進む。そこにいるだけで力強く思う人もいる。役員は様々だ。

地域で子ども食堂「まんぶくキッチン」を運営して4年目になる。0歳から90歳までと年齢層は幅広く、手作りの食事を提供している。プロの音楽家をお呼びしたりなどして、楽しい時間を過ごしている。子ども食堂という



女性の視点と多様な視点・訓練の様子

貧困家庭と言われがちだが、決してそんなことはなく、世代を超えた地域交流の場だ。地域のおばあちゃんたちが赤ちゃんの手を握って「かわいいね」と言うだけで、お母さんは笑顔になる。

会議室での意見交換ではなく、人と人の関わりが素晴らしいものだと思い、実践している。小学生、大学生、不登校の子を持つ親、震災で家族を失った人、消防分団、民生委員、青年団、婦人部など、それぞれの意見がある。多様な視点は交流することから始まる。様々な人との交流は、町内会運営だけではなく、私の人生にも彩りを与えてくれている。

来年度より、男性2人が役員として就任する。新しい風がどのように吹いていくのか楽しみなどところだ。これからも共に歩む仲間とともに、身の丈にあったオリジナリティーのあるお互い様の町内会を目指して邁進していきたいと思う。

